ＳＭＣ金融・経済マーケットレポート

Reporter Your Financial Brain　SMC 豊島 健治

ポスト産業資本主義の今

（「差異性」を創り出す時代）

……いま多くの人々が言い知れぬ不安に駆られているのは、現在日本経済の低迷状態が、たんなる景気循環の一局面には還元できない、はるかに長期的な潮流の変化の結果であることを、感じ取っているからにちがいありません……

最近、経済学者・岩井克人さんの「会社はこれからどうなるのか」を読んだ。冒頭の一文はその中に書かれた文章を転記したものであるが、私達が置かれた状況を適格に言い表していると思った。この方は「東大」経済学部教授で、どちらかと云えば私の嫌いな「深窓の経済学者」である。しかし、著書はこの本の中で、日頃私が漠然と考えていた事柄を明快に解きほぐしてくれていた。「そうだ、そうだよな」私は何度も頷きながら本を読み進めた。

今回は、岩井さんがこの本で述べている中で皆さんに参考になる点を要約してお知らせしたい。

資本主義を定義すれば「利潤を永続的に追求していく経済活動」となるが、その肝心の利潤は「他との差異性」から生まれる。「差異性が利潤を生み出す」という原理は商業資本主義が発見した原理であるが、その後の産業資本主義、ポスト産業資本主義の時代をも貫く一般原理である。つまり、今も昔も、「差異性に利潤の源泉がある」ことに変わりはない。

変化したのは、資本主義の形態の変化であり、それに伴う差異性そのものである。

産業革命以前の商業資本主義の時代は、二つの市場の間に存在する価格の差異が利潤の源泉だった。地理的に異なる市場間の価格の差異を媒介にして利潤を生み出したのである。しかし、産業革命後支配的形態となった産業資本主義は商業資本主義とは異なる。

産業資本主義は多数の労働者を使って大量生産システムを可能にした。その結果、労働者の生産性がそれ以前と比べて飛躍的に高まった。この時代の利益の源泉は、労働生産性と実質賃金率の差異性にあった。つまり生産性以下の安い賃金で働く大量の労働者の存在がその差異性を担保した。今の中国を思い浮かべて見れば分かり易いが、農村部における過剰人口がそれを可能にした。

然し乍ら、農村部の過剰人口はいつまでも続かない。それを使い切った国（イギリス・西欧→アメリカ→日本）から産業資本主義は徐々に終わりを告げるようになった。それが明確になってきたのは、先進国では１９７０年代である。その頃から、利潤の源泉である差異性を何処に求めるか新たな競争が始まった。資本主義が資本主義であり続けるためには、利益を継続的に生み出す元の差異性を創り出す必要があるのだ。

これが今、目の前で起こっている「ポスト産業資本主義」の実態である。「知識社会」「高度情報化社会」、あるいは「第三の波」等という呼び名はポスト産業資本主義の別名に他ならない。

ポスト産業資本主義の特色は、変化が目まぐるしい速度で起こる所にある。その変化を引き起こすものが、ＩＴ革命であり、グローバル化であり、金融革命である。この３つの現象が原因となり結果となって変化を起こすため本質を見失いがちであるが、ポスト資本主義時代も利潤の源泉が差異性であることに変わりはない。過去の資本主義と根本的に異なるのは、差異性を「意識的に創り出す」所（それを「新しさ」と呼ぶ）にある。

それは、新技術の発明、新製品の開発といったものだけでなく、新しい組織形態や新しいサービスの導入、新しい市場の開拓といった形で、他の企業ができないことを実現することによって、一時的にでも利潤を確保していかざるをえない資本主義の形態である。そして、瞬く間に追随者が出現する資本主義でもある。

差異性を意識的に創り出す方法を究極まで推し進めると、それは「情報の商品化」に行き着く。情報は、同一情報は価値を持たないという意味で、情報そのものが差異性である。そして、差異性としてしか意味を持たない情報の商品化は、即ち「差異性の商品化」である。差異性そのものを商品として売ることによって利潤を得る――これがポスト産業資本主義の究極の形態である。…

私達はどうやらポスト産業資本主義という差異性を生み出すことがかなり難しい時代に遭遇しているようだ。最早、工場や店舗や、それを実現する資金量が差異性を発揮する社会はピークを過ぎつつある。「差異性の商品化」――地方の中小企業といえども、この問題を絶えず意識して行かなければならなくなった。

《複製・転載等はご連絡下さい》　TEL. 0438−53−6092 FAX. 0438−53−6096
URL: http://www.hi-ho.ne.jp/smc_toyo/　Email：smc_toyo@hi-ho.ne.jp